

オープンサイエンスの推進と大学図書館の取組みに関する懇談会（要旨）

日 時： 平成 27 年 2 月 16 日（月）13:00～15:00

場 所： 国立情報学研究所 21 階

参加者： 有川節夫（九州大学名誉教授（前総長））

引原隆士、甲斐重武（京都大学図書館）

加藤信哉（筑波大学附属図書館）

竹内比呂也、杉田茂樹、三角太郎（千葉大学附属図書館）

安達淳、山地一禎、尾城孝一、相原雪乃、高橋菜奈子、片岡 真
（国立情報学研究所）

1. 主旨説明

内閣府の「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会」での議論は、第 5 期科学技術計画に反映される可能性が高い。座長の有川先生と大学図書館関係者で懇談会を持ち、図書館の役割を報告書に盛り込みたい。

2. 報告

- （1）国内の機関リポジトリの現状について（杉田茂樹）
- （2）大学におけるオープンアクセス方針の策定について（引原隆士）
- （3）英国における研究データの管理・発信に関する取り組みについて（山地一禎）

3. 意見交換

- ・ 機関リポジトリに関する大学図書館のこれまでの活動は十分に評価できる。研究データについても、図書館のこれまでの実績に期待するところは大きい。
- ・ 京都大学では現在オープンアクセス・ポリシーの策定を進めている。オプトアウト方式を採用し、「原則公開」とすることにより、シンプルな方針となっている。
- ・ 京都大学のような日本を代表する大学が率先して OA ポリシーを策定することの意味は大きい。相当なインパクトがあると思われる。
- ・ 義務化のポリシーを実効性のあるものとするには、ポリシーを作るだけではなく、ポリシーへの準拠を広めていく活動が求められる。その際、図書館がこれまでやってきた草の根的な登録普及活動が役に立つはずである。
- ・ 研究データに関する国際会議（IDCC: International Digital Curation Conference）に参加したが、日本の研究データに対する取り組みは、海外に比べて 10～15 年程度遅れているという印象を強く持った。今回の会議には、データサイエンティストとサブジェクトライブラリアンが多数参加していた。研究者自身に研究データのメタデータ管理

を期待することはできないので、図書館員がメタデータを管理して、データ公開するようになっている。

- ・ 研究データの管理や発信についても、図書館という組織を使いながら、図書館の仕事の中身をシフトさせ、図書館の仕事として位置づけることが極めて大事だろう。図書館職員は地道なことを息長く続けることが得意だ。情報基盤センターなどは変化に対応するのは早い、長続きしない傾向がある。
- ・ データジャーナルのディスクリプションなどを見ていると、現状の図書館員ではデータ記述を作れないという危惧がある。
- ・ 確かに現在の図書館職員では対応できないかもしれないが、図書館という器を機能させて、そこでデータキュレータが持続的に仕事をするような環境を整えればよい。
- ・ 英国では、データディスクリプションは図書館員が記述している。図書館員の意識改革が必要なのではないだろうか。
- ・ 図書館から声をあげて、積極的にデータキュレーションの役割を担うくらいでないといけない。研究支援に踏み込むためにも研究データに対して前向きな姿勢を示す必要があるだろう。
- ・ オープンサイエンスの推進、そのための研究データのオープン化にとって最も重要なのは人材であろう。人材育成に関しては2つの道筋が考えられる。一つは専門の育成コースを立ち上げ、そこで専門家を育てる。もう一つは、学内を横断するような組織を作って、PhD を活用するといった方策が考えられる。いずれにせよ、一定の数の人材を確保することが極めて重要だ。人材育成や人材の確保についても、先進的な大学に率先して範を示してもらいたい。
- ・ 高エネや天文などの共同利用機関が扱うようなビッグデータは、既に分野のコミュニティがあるので、そこに任せておけばよいだろう。他の研究データについては、まずいくつかの大規模な大学が先導するといった進め方がよい。
- ・ 検討会では、研究データをオープンデータ（行政データ等）の違いを意識して議論しているが、社会科学では、行政データも研究の対象となる。そうすると、研究データとオープンデータ（行政データ）の境目も曖昧になってくる。オープンデータ（行政データ）への目配りもしっかりしておきたい。
- ・ 研究データの保全や長期保存については、ディスクスペースの問題だけでなく、将来のマイグレーションのことも考えておかなければならない。
- ・ 本検討会からの報告を受けて、文科省の科学技術・学術審議会の学術情報委員会でも議論が継続されていくだろう。オープンサイエンスを推進する際のさまざまな課題や大学図書館が果たすべき役割について議論が行われていくものと思われる。